

コガタカワシンジュガイ

イシガイ目 カワシンジュガイ科

Margaritifera kurilensis (Zatravkin and Starobogatov, 1984)

環境省 絶滅危惧ⅠB類

- ❖ 形態 カワシンジュガイより小型で、殻長は通常 10cm を超えない。生貝の殻形態だけでは同定が難しいが、殻の形は長卵形で、前縁が丸く、カワシンジュガイのように突出しない。殻標本では、前閉殻筋痕の形状が尖った耳状で、擬主歯は厚くて大きいのが特徴である。
- ❖ 分布の概要 八幡平市で確認されている。
- ❖ 生息状況 河川上流～源流域の清澄で低水温（夏場で 20℃以下）の砂泥質や石礫質の河床に直立して生息する。本県の個体群は、個体数が少ないためコロニーにはならず点在して生息していた。残念ながら、現在は個体をまったく確認できない状況である。
- ❖ 脅威 出水による生息環境の攪乱が最大の脅威である。実際、近年の集中的降雨にともなう出水により生息地の環境は激変している。また、本種幼生の宿主であるイワナ（アメマス）稚魚や若魚が再生産に不可欠であるため、これらの減少は大きなダメージとなる。
- ❖ 特記事項 本種は、2005 年に日本固有種として新種記載されたが、その後サハリンからカムチャツカ半島まで広く分布することが判明した。その後、ロシアの研究者らが学名を *M. middendorffi* に変更したが、ごく最近、極東域で記載された多くのカワシンジュガイ類の模式標本を含む詳しい形態比較と遺伝分析に基づく分類学的再検討がなされた。近年本種を含むカワシンジュガイ科貝類の系統関係が徐々に明らかにされつつある。本県での希少性は非常に高く、絶滅が強く懸念される。令和 4 年「種の保存法」対象種（特定第二種）に指定されている。
- ❖ 文献 1. 竹内基ほか (2007)、2. Takeuchi *et al.* (2015)、3. 竹内基ほか (2016)、4. Lopes-Lima *et al.* (2018)、5. Sakai *et al.* (2022)、6. 柿野亘ほか (2023)

(竹内 基)

メンカラスガイ

イシガイ目 イシガイ科

Cristaria clessini (Kobelt, 1879)

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 大型二枚貝で、個体によっては殻長 20cm 以上になるが、殻質はやや薄い。殻の形には変異が多いが、全般に後背縁は緩やかに凹み、全体はやや膨らむ印象である。背縁に翼状突起があり、稚貝では特に良く発達する。殻には擬主歯がなく、後側歯が前後縁に 1 つずつある。正確を期すために種の判定はミトコンドリア DNA（以下 mtDNA）の遺伝分析（以下遺伝分析）により行った。
- ❖ 分布の概要 一関市に生息する。なお、花巻市のゼニタナゴ生息地に産卵母貝として導入されたのは、遺伝分析によりカラスガイ（国内外来種）と判定された。
- ❖ 生息状況 水量の多い河川や水路の砂泥底に殻を埋没させて生息する。稚貝が少なく、個体数は確実に減少している。
- ❖ 脅威 生息場所での水量減少、水質悪化、環境の攪乱などが脅威である。また、強い採集圧（産卵母貝用の密漁）や幼生の宿主魚類（ヨシノボリ類など）の減少はダメージとなる。
- ❖ 特記事項 本県はこれまでカラスガイの分布域であったが、2020 年に提唱された新分類体系により関西から中部・関東・東北太平洋側に分布するのはメンカラスガイ（琵琶湖・淀川水系固有の地方型とされていた）であると見直された。生息地に最も近い縄文遺跡（貝鳥貝塚）ではカラスガイ（おそらく本種）その他のイシガイ類が出土していることから、これらは確実な自然分布である。現在の生息範囲は非常に狭く、個体群存続への不安要素が多い。今回は標準和名（以下種名）を替えてリストしている。
- ❖ 文献 7. 近藤高貴 (2008)、8. 近藤高貴 (2020)、9. Lopes-Lima *et al.* (2020)、10. 竹内基ほか (2021)

(竹内 基)

ドブガイ属未記載種

イシガイ目 イシガイ科

Sinanodonta sp.

環境省 なし

- ❖ 形態 殻長 10～15cm で、殻の表面は緑褐色から茶褐色である。マルドブガイに似るが、腹縁はそれほど突出せず、殻の膨らみも弱い。幼貝は殻幅がより薄く、成貝とは印象が異なる。殻には擬主歯や後側歯がない。殻形態のみの同定は困難なため、遺伝分析により種を判定した。
- ❖ 分布の概要 盛岡市以南の内陸部に不連続に分布する。
- ❖ 生息状況 溜池や水路などの泥底・砂泥底に埋もれて生息する。いずれの生息場所においても個体数は極めて少ない。他のイシガイ類と混生する場所が希に見られる。
- ❖ 脅威 生息環境の悪化や物理的改変が脅威である。イシガイ目貝類の再生産には幼生の宿主魚類（ハゼ類など）が不可欠であるため、魚類の減少は致命的である。また、現在進行する溜池改廃事業が本種の生息環境に悪影響を及ぼす懸念は大きい。
- ❖ 特記事項 マルドブガイは琵琶湖・淀川水系固有種とされていたが、新分類体系において、青森県の個体群は mtDNA のハプロタイプがそれとは異なることから自然分布と判断された。その後、本県でも青森県の個体群に近い系統の存在が確認された。ごく最近、核ゲノム（SNP など）を用いた詳細な分析により関東以北に分布する個体群はマルドブガイとはまた別の未記載種（隠蔽種）の可能性が高いことが判明した。この見解に基づき、今回は未記載種ながらその希少性を重視して新たにリストしている。
- ❖ 文献 6. 柿野亘ほか (2023)、7. 近藤高貴 (2008)、8. 近藤高貴 (2020)、9. Lopes-Lima *et al.* (2020)、11. Sano *et al.* (2020)、12. Sano *et al.* (2022)

(竹内 基)

タテボシガイ

イシガイ目 イシガイ科

Nodularia nipponensis (Martens, 1877)

環境省 なし

- ❖ 形態 殻長は最大 9 cm ほどで、殻は長卵形で厚く、殻頂が前縁側に偏る。殻表面は黒色で艶があり、幼貝では顆粒模様が顕著だが、成貝では消失することが多い。擬主歯はやや厚みのあるスプーン状で高さがあり、背面側に放射状の溝がある。生貝を上から見ると、侵食された左右の殻頂部が目玉状に見える。種の判定は遺伝分析により行った。
- ❖ 分布の概要 金ヶ崎町、奥州市、一関市に不連続に分布する。
- ❖ 生息状況 河川や水路の砂泥底または石礫底、あるいは溜池岸辺の泥底に殻全体をほぼ埋没させて生息する。タガイなどと混生する場所が希に見られる。原因不明だが、近年個体数の減少が著しく、近い将来絶滅が危惧される状況にある。
- ❖ 脅威 水質悪化や環境改変が最も懸念されるが、同時に採集圧（産卵母貝用の密漁？）が危惧される。再生産には幼生の宿主魚類（主にハゼ類）が不可欠なため、これら魚類の減少は致命的なダメージとなる。
- ❖ 特記事項 タテボシガイは、これまで琵琶湖・淀川水系固有のイシガイ地方型とされていたが、新分類体系では関西から北海道まで分布する日本固有種へと格上げされた。貝鳥貝塚ではイシガイとして出土記録がある。本県では分布が極めて局限される上、個体数の減少が著しい。今回はイシガイから種名を替えてリストしている。
- ❖ 文献 1. 竹内基ほか (2007)、7. 近藤高貴 (2008)、8. 近藤高貴 (2020)、9. Lopes-Lima *et al.* (2020)、10. 竹内基ほか (2021)、13. 佐竹邦彦 (2015)

(竹内 基)

ヒダリマキモノアラガイ

モノアラガイ目 ヒラマキガイ科

Culmenella prashadi (Clench, 1927)

環境省 絶滅危惧Ⅰ類

- ❖ 形態 殻高は最大 6 mm、殻径は 3 mm の小型の巻貝である。淡水産巻貝では珍しい左巻きの殻をもち、殻表面の螺条はよく目立ち、殻自体が透明なため黄褐色の軟体部が透けて見える。
- ❖ 分布の概要 一関市で確認されている。
- ❖ 生息状況 池沼の岸辺の落葉・落枝の多い水底、あるいは水生植物の茎や葉の上で生活し、付着藻類を餌としている。一関市の生息池はもともと個体数が少なかったが、近年池の堤体が崩れて水量が激減するなど環境の悪化が著しく、まったく生息を確認できない。
- ❖ 脅威 生息池の水温上昇、水質汚濁、水位低下などが脅威である。
- ❖ 特記事項 全国的に極めて希少な動物であり、生息を確認できる場所のごく限られる。本県では一カ所のみのため希少性は極めて高く、かつ絶滅が危惧される状況にある。生物学的情報がほとんどないため、具体的な保全対策も難しい。
- ❖ 文献 14. 増田修・内山りゅう (2004)、15. 大八木昭 (2020)

(竹内 基)

カワシンジュガイ

イシガイ目 カワシンジュガイ科

Margaritifera laevis (Haas, 1910)

環境省 絶滅危惧ⅠB類

- ❖ 形態 殻長 10～15cm と大型である。殻は黒褐色で細長く、殻質は厚く、腹縁中央部がややくぼみ、前縁が楕円形となる個体が多い。生貝の形態だけでコガタカワシンジュガイと区別するのは難しいが、本種の殻標本では前閉殻筋痕の形状は丸い耳状となる。
- ❖ 分布の概要 北上市以北の内陸部と沿岸北部に広く分布する。
- ❖ 生息状況 低水温（夏場でも 20℃を超えない）で水質の良い流水中の砂礫・石礫河床に直立して生息する。バクテリアなどの有機物をろ過摂食している。場所により個体数にかなり差はあるが、全般に減少傾向が認められる。特に沿岸河川では、近年個体数を大きく減少させた場所が少なくない。本種は、河川におけるタナゴの産卵母貝として重要である。
- ❖ 脅威 河川工事などによる生息場所の攪乱は脅威である。また、場所によっては過度な採集圧（産卵母貝用の密漁）がダメージとなる。幼生の宿主となるヤマメが本種の再生産に不可欠なため、その生息密度が本種個体群に与える影響は非常に大きい。
- ❖ 特記事項 本種は、岩泉町（2010 年）、野田村（2011 年）、滝沢市（2023 年）で天然記念物に指定されている。また、令和 4 年「種の保存法」対象種（特定第二種）に指定されている。カワシンジュガイ類に関する研究はこの 10 年間で驚くほど進み、コガタカワシンジュガイを含む世界のカワシンジュガイ科貝類の系統や進化史が明らかにされつつある。また、本種の水生態系における窒素循環に果たす役割についても理解が進んでいる。今後宿主魚類との種間関係（共進化）の研究が進展すれば、生物地理学的な議論がさらに深まると期待される。
- ❖ 文献 1. 竹内基ほか (2007)、2. Takeuchi *et al.* (2015)、3. 竹内基ほか (2016)、4. Lopes-Lima *et al.* (2018)、12. Sano *et al.* (2022)、16. Takeuchi *et al.* (2022)

(竹内 基)

ヒガシタブネドブガイ

イシガイ目 イシガイ科

Buldowskia kamiyai Sano, Hattori and Kondo in Lopes-Lima et al. 2020

環境省 なし

- ❖ 形態 殻長 10～15cm で、殻質は薄く、擬主歯や後側歯はない。若齢貝は緑灰色で殻幅は薄く、背縁と腹縁はほぼ平行である。成貝では黒色が強くなり、殻幅が厚みを増す。殻形態のみの同定は困難なため、遺伝分析により種を判定した。
- ❖ 分布の概要 八幡平市以南の内陸部（西和賀町を含む）に分布する。
- ❖ 生息状況 溜池や水路の砂泥底や砂礫底に埋没して生息する。個体数は場所によって異なり、西和賀町では極端に少なく、八幡平市や奥州市では比較的多い。
- ❖ 脅威 生息場所は、自然度の高い土水路（場所によりコンクリート護岸）であることから、生息環境の物理的攪乱や水質汚染などは脅威である。溜池改廃事業が生息環境に悪影響を及ぼす懸念がある。
- ❖ 特記事項 新分類体系では従来のフネドブガイ属 *Anemina* からタブネドブガイ属 *Buldowskia* が新たに分けられたが、本種は後者における新種として記載された日本固有種である。今のところ分布範囲は福島県から本県までの主に太平洋側に局限される。生物学的な情報がほとんどなく、幼生の宿主魚類など未解明な部分が多いため、今後の研究が待たれる。
- ❖ 文献 7. 近藤高貴 (2008)、8. 近藤高貴 (2020)、9. Lopes-Lima *et al.* (2020)、17. 北村淳一 (2020)、18. 北村淳一・内山りゅう (2020)

(竹内 基)

ヌマガイ

イシガイ目 イシガイ科

Sinanodonta lauta (Martens, 1877)

環境省 なし

- ❖ 形態 殻長 10～20cm と大型で、若齢貝は腹縁が丸い卵円形で殻幅が膨らむ印象だが、老成貝では全体に膨らんだ紡錘型になる。殻は茶褐色から黒色を呈し、擬主歯・後側歯を持たない。殻形態だけの同定は困難なため種の判定は遺伝分析により行った。
- ❖ 分布の概要 花巻市から奥州市まで分布する。
- ❖ 生息状況 溜池や水路の泥底・砂泥底に生息するが、止水的な環境をより好む。花巻市の溜池群では明らかに減少しており、県南部では場所にもよるが個体数は多くない。他のイシガイ類と混生する場所も一部認められる。
- ❖ 脅威 生息環境の改変や悪化が脅威である。本種は、富栄養化した池沼にも生息するが、極端な水質悪化には耐えられないだろう。この観点からも溜池改廃事業による生息池への悪影響が懸念される。また、本種の再生産には幼生の宿主となる魚類（主にハゼ類）が不可欠だが、宿主魚類が生息しない場所が散見される。
- ❖ 特記事項 新分類体系では従来のドブガイ属 *Anodonta* はタガイ属 *Beringiana* とドブガイ属 *Sinanodonta* に分けられ、本種は後者へ編入されている。ただし、後者内には過去に起こった種間交雑により他種からの遺伝子浸透が色濃く認められ、分類には課題が多く残るようだ。本種は、タナゴ類にとって重要な産卵母貝であり、ゼニタナゴの再生産には欠かせない存在だが、生息池での減少が危惧される。
- ❖ 文献 1. 竹内基ほか (2007)、6. 柿野亘ほか (2023)、7. 近藤高貴 (2008)、8. 近藤高貴 (2020)、9. Lopes-Lima *et al.* (2020)、11. Sano *et al.* (2020)、12. Sano *et al.* (2022)

(竹内 基)

マツカサガイ広域分布種

イシガイ目 イシガイ科

Pronodularia cf. japonensis 1

環境省 準絶滅危惧 (マツカサガイ)

- ❖ 形態 殻長は普通 4～6 cm だが、最大で 10cm ほどになる。殻は卵円形か長卵形で、殻頂が前縁に偏り、表面には大粒顆粒が逆 V 字状に並ぶ（大形個体では不明瞭）。擬主歯は根元が厚く、背面側に明瞭な溝を持つスプーン状である。生貝の殻形態のみでマツカサガイ 2 種を識別するのは難しいため、遺伝分析によって種の判定を行った。
- ❖ 分布の概要 金ケ崎町、北上市、西和賀町で確認されている。
- ❖ 生息状況 低水温で水質の良い河川や溜池水路の砂底・砂礫底に殻を埋没させて生息する。場所によって個体数には差があるが、西和賀町では減少傾向が著しい。内陸部では、希に他のイシガイ類（マツカサガイ北東本州固有種・タガイなど）と混生する場所がある。
- ❖ 脅威 水質悪化や生息環境の攪乱などが脅威である。また、個体数が少ないため地域の食習慣による採集圧も無視できない。さらに、幼生の宿主魚類（ハゼ科・コイ科魚類）が再生産には不可欠なため、これらの減少は脅威となる。溜池改廃事業により、本種（と北東本州固有種）が大きなダメージを受ける懸念がある。
- ❖ 特記事項 新分類体系により従来のマツカサガイは便宜的に 3 種（東海固有種・広域分布種・北東本州固有種）に分けられたが、本種はそのうち青森県以南の本州日本海側・四国・九州まで最も広く分布する日本固有種である。本県において本種の生息が確認されたのは、今回が初めてとなる。従来のマツカサガイの学名が 3 種のどれに該当するのかは未決着のため、今後の分類学的精査が求められる。今回種名を分けてリストしている。
- ❖ 文献 1. 竹内基ほか (2007)、7. 近藤高貴 (2008)、8. 近藤高貴 (2020)、9. Lopes-Lima *et al.* (2020)、18. 北村淳一・内山りゅう (2020)

(竹内 基)

マツカサガイ北東本州固有種

イシガイ目 イシガイ科

Pronodularia cf. japonensis 3

環境省 準絶滅危惧 (マツカサガイ)

- ❖ 形態 殻長は 4～6 cm で、最大 10cm ほどになる。殻は卵円形か長卵形で、殻頂が前縁に偏り、表面には逆 V 字状に大粒顆粒が並ぶ。殻の後縁には傾斜があり、擬主歯は背面側に明瞭な溝を持つ三角錐状である。生貝の殻形態のみでマツカサガイ 2 種を識別するのは難しいため、遺伝分析によって種を判定した。
- ❖ 分布の概要 八幡平市以南の内陸部に不連続に分布する。
- ❖ 生息状況 河川や水路など、やや低水温の流水がある砂礫底に殻を埋没させて生息する。場所によって個体数には幅があるが、八幡平市や花巻市では減少が著しい。他のイシガイ類数種と混生する場所も見られるが極めて希である。
- ❖ 脅威 マツカサガイ広域分布種と同様である。
- ❖ 特記事項 本種は、新分類体系で分けられた 3 種のうち、関東以北の本州太平洋側に分布する日本固有種である。マツカサガイ 3 種の中では系統的に最も早く種分化した集団と考えられるが、生物学的な情報は非常に少ない。分類学的整理を含め、今後の研究が待たれる。今回は種名を分けてリストしている。
- ❖ 文献 1. 竹内基ほか (2007)、7. 近藤高貴 (2008)、8. 近藤高貴 (2020)、9. Lopes-Lima *et al.* (2020)、17. 北村淳一 (2020)、18. 北村淳一・内山りゅう (2020)

(竹内 基)

ヨコハマシジラガイ

イシガイ目 イシガイ科

Inversiunio jokohamensis (Ihering, 1893)

環境省 準絶滅危惧

- ❖ 形態 殻長は最大 7 cm になり、殻は高さのある長卵形で、後縁がやや尖り、上半部に細かい顆粒状模様がある。擬主歯は三角形か平行四辺形で、背面に放射状の溝があり、殻の先端まで厚みがある。
- ❖ 分布の概要 内陸部（軽米町以南）の広い範囲に不連続に分布する。
- ❖ 生息状況 溜池などの止水域よりも小河川や水路の流水中に生息し、砂泥や砂礫質底に殻全体を埋没させている。他のイシガイ類と混生する場所が認められ、個体数が比較的多い場所もある。
- ❖ 脅威 生息地の物理的改変と極端な水質悪化が脅威である。溜池改廃事業による影響が懸念される。幼生の宿主としてハゼ類（ヨシノボリ類・ヌマチチブなど）を主に利用するため、これら魚類の減少は大きなダメージとなる。
- ❖ 特記事項 本種は、関西から北海道南部まで分布する日本固有種である。mtDNA に基づく系統解析が徐々に進み、本種にも地域集団の存在が認められる。それぞれの地域における宿主魚種の解明や産卵生態など、未解明な部分も多く今後の研究が待たれる。
- ❖ 文献 1. 竹内基ほか (2007)、7. 近藤高貴 (2008)、8. 近藤高貴 (2020)、9. Lopes-Lima *et al.* (2020)、19. Itoh *et al.* (2010)

(竹内 基)

タガイ

イシガイ目 イシガイ科

Beringiana japonica (Clessin, 1874)

環境省 なし

- ❖ 形態 殻長は 10cm ほどで、殻は長卵形で殻幅の膨らみは強くない。殻表面がなめらかな黒色で模様はなく、腹縁と背縁はほぼ平行で、後縁が緩やかに傾斜する。擬主歯や後側歯はない。イシガイ類の中では識別しやすい種だが、正確を期して遺伝分析により種を判定した。
- ❖ 分布の概要 盛岡市以南の内陸部に広く分布する。
- ❖ 生息状況 溜池や水路の砂泥底や砂礫底に埋もれて生息する。盛岡市周辺では個体数は少ないが、花巻市や奥州市ではまとまった数が見られる場所がある。他のイシガイ類との混生が最も多く見られる種である。
- ❖ 脅威 ヌマガイとほぼ同様である。
- ❖ 特記事項 新分類体系によって従来のドブガイ属 *Anodonta* はタガイ属 *Beringiana* とドブガイ属 *Sinanodonta* に分けられたが、本種は前者に編入された日本固有種である。関東から本県までの太平洋側が本種の分布域とされる。本種は、ヌマガイと同様にタナゴ類の重要な産卵母貝であり、ゼニタナゴの再生産においても重要な存在である。
- ❖ 文献 1. 竹内基ほか (2007)、6. 柿野亘ほか (2023)、7. 近藤高貴 (2008)、8. 近藤高貴 (2020)、9. Lopes-Lima *et al.* (2020)、11. Sano *et al.* (2020)、12. Sano *et al.* (2022)

(竹内 基)

チビマメシジミ

ドブシジミ目 ドブシジミ科

Odhnneripisidium parvum (Mori, 1935)

環境省 なし

- ❖ 形態 マメシジミ類では最も小型で、殻長は2～3 mm ほどである。殻頂はやや後縁に偏り、前縁は丸みを帯びるが後縁は截形となる。殻の色は白色あるいは灰白色で、殻内部の精巢や卵巣の配置に特徴がある。殻形態のみでは同定困難なため、遺伝分析によって種を判定した。
- ❖ 分布の概要 北上川水系のやや広い範囲に不連続に分布する。なお、三陸沿岸の河川にもマメシジミ類が分布するが、それらの遺伝分析は行われていないため実態は不明である。
- ❖ 生息状況 低水温の池沼や河川中～上流域の砂泥・砂礫底に生息する。基本的生態はマメシジミ属の1種①②と同様と思われる。ただし、確認できる個体数は少ない。
- ❖ 脅威 マメシジミ属の1種①②と同様に、生息場所の改変や消失が脅威である。本種は特に低水温を好む傾向にあり、環境の変化に対して敏感である可能性が高い。
- ❖ 特記事項 マメシジミ類の系統研究は世界的（主に北半球）に進み、新知見が徐々に蓄積されている。得られたサンプルと国内および周辺地域で登録された mtDNA (16S) のデータを基に系統樹を作成して種判定を行った。その結果、本種は国内でチビマメシジミとして登録されたものと同じクレード（祖先を共有する系統）になり、塩基相同性が極めて高かった（最大 100%）ことからチビマメシジミと判断した。一方、次の2種とは遺伝的にかなり遠く、むしろドブシジミ属 *Sphaelium* に近かった。以上のことから、海外の研究に依拠して本種は別属の独立種としてリストした。なお、個体数の変動には注意が必要である。
- ❖ 文献 20. Mori (1938)、21. Onoyama *et al.* (2001)、22. Lee, Ó Foighil (2003)、23. Saito *et al.* (2022)

(竹内 基)

マメシジミ属の1種①

ドブシジミ目 ドブシジミ科

Pisidium sp. 1

環境省 なし

- ❖ 形態 超小型の二枚貝で、殻長は通常3～6 mm である。殻の色や形態は次種②に似ているが、より詳しい形態情報は提示できない（生貝を用いて遺伝分析用の DNA 抽出を行ったため）。
- ❖ 分布の概要 北上川水系の広範囲に分布する。なお、三陸沿岸の河川にもマメシジミ類が分布するが、それらの遺伝分析は行われていないため実態は不明である。
- ❖ 生息状況 河川中流域の有機物が堆積した砂泥または砂礫質の場所に多く、底質中にもぐり込んで生息する。北上川水系では次種②と混生する場所も見られる。繁殖様式は卵胎生で、鰓内で育てた数個の稚貝（胎児）を産出する。
- ❖ 脅威 河川工事などによる生息場所の消失が最大の脅威である。
- ❖ 特記事項 チビマメシジミと同様の方法で種の判定を行った。その結果、本種は国内とロシアでマメシジミ属の1種として登録されたものと同じクレードになり、次種②とは遺伝的に離れた別クレードを形成したため、本種は、次種②とは別種であると判断した。今後本種に妥当な種名を充てるためには分類学的精査が不可欠となる。ここでは次種②と異なるマメシジミ属の1種としてリストしておく。
- ❖ 文献 20. Mori (1938)、22. Lee, Ó Foighil (2003)、23. Saito *et al.* (2022)

(竹内 基)

マメシジミ属の1種②

ドブシジミ目 ドブシジミ科

Pisidium sp. 2

環境省 なし

- ❖ 形態 前種①と同様の超小型マメシジミである。殻の膨らみが強く、殻頂は後縁に偏り、殻の色は白色か黄白色である。殻形態からハイイロマメシジミ *Pisidium casertanum* に同定できる可能性もあるが、遺伝分析に基づいて判定した。
- ❖ 分布の概要 北上川水系に生息する。なお、三陸沿岸河川のマメシジミ類との関係については前種①と同様である。
- ❖ 生息状況 基本的生態は前種①と同様と推察されるが、個体数はやや多い。
- ❖ 脅威 前種①と同様である。
- ❖ 特記事項 チビマメシジミと同様の方法で種の判定を行った。その結果、本種は国内でハイイロマメシジミまたはマメシジミ属の1種として登録されたものと同じクレードにまとまった（同種と推定）。だが、この結果だけで本種をハイイロマメシジミと即断はできない。なぜなら *P. casertanum* は国内外で複数登録されているうえ、系統樹上では各々異なるクレードに分かれて出現している。すなわち、学名 *P. casertanum* は複数の種に適用されているのだ。したがって本種②は、今後の分類学的検討が必要なため、マメシジミ属の1種としてリストしておく。
- ❖ 文献 20. Mori (1938)、21. Onoyama *et al.* (2001)、22. Lee, Ó Foighil (2003)、23. Saito *et al.* (2022)、24. 秋山吉寛・臼井平 (2017)

(竹内 基)

マシジミ

マルスダレガイ目 シジミ科

Corbicula leana (Prime, 1864)

環境省 絶滅危惧Ⅱ類

- ❖ 形態 殻長は普通2～3 cm だが、溜池ではかなり大型になる個体も見られる。殻は三角形で、幼貝は黄緑色だが、成貝は黒褐色か黒色が強くなる。殻表面の成長脈はやや粗く、殻内部は白色・青白色・濃紫色など場所や個体によりさまざまである。
- ❖ 分布の概要 八幡平市以南の内陸部に分布する。河川では多くの場所で近縁種タイワンシジミに置きかわりつつあり、本種は主に溜池やその周辺に残っている。
- ❖ 生息状況 溜池や水路の砂泥・砂礫底に殻全体を埋没させて生息する。本種は、自家受精が可能な雌雄同体の3倍体集団であり、雄性発生による再生産を行っている。タイワンシジミの分布域拡大により、本種個体群は徐々に減少しつつある。
- ❖ 脅威 生息地の環境変化や水質の悪化は脅威であるが、溜池改廃事業の影響も懸念される。また、タイワンシジミと本種との交雑（タイワンシジミ精子の侵入）が進行すると、あまり時間を置かずその場所の集団の形質的・遺伝的特徴がタイワンシジミへと置きかわる。
- ❖ 特記事項 本種は、全国に広く分布するが遺伝的には極めて均質という、他の生物にあまり例のない特異な集団である。これは本種が精子によるクローン繁殖を行う3倍体集団のためである。一方で、外来種（と考えられる）タイワンシジミとの形態的・遺伝的な違いはわずかで、両者はごく近い近縁種または本種がタイワンシジミの一系統にすぎないとする意見も多い。殻形態や生態に変異の多いシジミ属貝類については世界中で研究が進んでいるが、詳細な遺伝的研究の進展によって各集団の適正な分類学的位置づけがなされることが期待される。なお、本種個体群の動態については注意が必要である。
- ❖ 文献 25. 山田充哉ほか (2010)、26. 酒井治己ほか (2014)、27. Okawa *et al.* (2016)、28. 横山寿 (2019a)、29. 横山寿 (2019b)

(竹内 基)

アッカミジンツボ

エゾタマキビ目 ミズツボ科

Akiyoshia akka Habe, 1965

環境省 情報不足

- ❖ 形態 殻高 1.4～1.6mm、殻径 0.65～0.8mm の微少な巻き貝である。殻は薄く、半透明白質でわずかに光沢がある。蓋は薄く、半透明で卵形である。全体は細長い円錐形で、螺層は 5 階で縫合が明瞭であり、体層が大きく殻高の半分を占める。
- ❖ 分布の概要 岩泉町の安家洞（国の天然記念物）で記録がある。
- ❖ 生息状況 本種は、おそらく安家洞内の湧水や浸出水の溜まりなどで生活していたものと推察されるが、平成 28 年（2016 年）の台風 10 号の豪雨による大量の出水が洞内を溢流したため、生息環境が激変している。2022 年 11 月の現地調査ではまったく確認できなかった。
- ❖ 脅威 生息地の大規模な攪乱や水源の枯渇など生息域の環境変動が脅威であろう。
- ❖ 特記事項 安家洞での生息可能性は低いが、近隣の洞穴内でも発見される可能性は残る。本種を含む国内の近縁 11 種は、主に形態分類に基づいて記載されたが、生物学的情報（系統的・遺伝的情報など）が皆無である。本種が独立種である可能性はあるものの、今のところ断定はできない。生体の採取が可能であれば、分類学的精査が必要となろう。現地調査により、生息地の状況は確認できたが今後の検討を含めて情報不足種としておく。
- ❖ 文献 30. 波部忠重（1965）、31. 小松貴（2023）

（竹内 基）